

第2分科会テーマ

各教科を合わせた指導作業学習

自立に向けた、自信を身に付けるための作業学習

～心と心の通い合う、人とつながり合う活動～

支援学級 さいたま市立岸中学校 馬目喜芳

1 はじめに

特別支援学級の教育課程を編成していく上では、子どもたちの実態を把握し、各教科等の指導を中心に据えながら、知的障害の教育課程を取り扱う場合には、各教科等を合わせた指導を必要に応じて取り入れ、一人ひとりの自立に向けて学習を進めていくことが重要である。また、子どもたち一人ひとりに合わせた教育課程を編成し、指導することが特別支援学級を担当する魅力の一つであると感じている。その中でも、特に作業学習は子どもたちが、将来の社会生活に向けて働くことを意識しながら取り組むことができる授業である。本校の作業学習では個に応じた課題を設定し、子どもたち一人ひとりが意欲的に取り組むことができる活動を設定している。また、チーム（集団）で働く（作業学習を行う）ことで感じる事ができる喜びや気持ちを共有すること、自分の成長を確認する達成感を味わうことができるような活動を取り入れている。



2 学校・学部・学級等の概要

本校、特別支援学級は、知的障害学級1名、自閉症・情緒障害学級4名の計5名で活動している。『十人十色』を学級スローガンに掲げ、子どもたち一人ひとりの個性を生かしながら、現代社会において、自立に必要な力とは何かを日頃から考え、担当教員全員で意見を交換しながら教育活動に取り組んでいる。

3 取組の実際（具体的な実践）

本年度は、子どもたちが主体的に活動に取り組めるように『SDGs』、『指力』、『考え』の3つの視点を掲げて授業改善に取り組んだ。『SDGs』では持続可能な社会づくりに必要な17の目標を取り入れた活動や製品づくりができるような設定をした。『指力』では作業学習での活動に取り組みやすくなるように、指の巧緻性を高める活動を取り入れた。『考え』では作品や製品に対しての自分の考えや思いを表現することが意識できるような働きかけを行った。

(1) SDGsの学びを深める～作業学習につなげるために～

『SDGs』の学習は、総合的な学習の時間の中で取り組んだ。今年度2週間、ソフトバンクさんよりペッパーくん（AIコミュニケーションロボット）をレンタルすることができたので、学習の中で取り入れた。ペッパーくんを活用した農作業を通して、持続可能な目標とのつながりを深めることができました。SDGsの目標の中の「2、すべての人に安全で栄養のある食材を確保する。」「3、子どもから大人まで、みんなが健康でいられる。」等の内容から農作物の栄養価について調べ、無農薬で美味しい野菜をつくることの大切さに気づくことができました。さらに、興味をもった持続可能な目標について、子どもたちが個々に調べ学習を行い、ペッパーくんと一緒にプレゼンテーションを行った。ペッパーくんをどのように活用するかを子どもたちが考え、プログラミングを行い、画像提示機能や読み上げ機能、リアクション機能を活用し、掛け合いをしながらプレゼンテーションをすることで、子どもたちが興味をもって取り組み、『SDGs』の学習を深めることができました。また、「15、陸の生態系を守り、再生する。」では農作業をしていくことで、自然を大切に思う気持ちを育てることができた。さらに、農作業を通じた学習内容をプレゼンテーションソフトにまとめて文化祭で発表する際には、一人ひとりの『考え』を取り入れ、自分たちの思いをそれぞれの言葉や表現方法で発信することができた。このように、総合的な学習の時間で学習した知識を、作業学習で行う農作業や製品作りの取組につなげることができた。

(2) 人とのつながりを意識した農作業

農作業では、子どもたちが関心のある、季節に合わせた野菜の栽培に取り組み、1学期には、じゃがいも、きゅうり、ナス等の夏野菜を栽培した。栽培過程をカメラで記録してデータを保存し、成長過程や種類の確認でパソコンを使って、子どもたち同士が共有できるようにした。また、より良い農作業につなげられるように、地域の農業専門家の方に農地の整え方や、収穫までの管理の仕方を教えていただいた。さらに、農業をされている方をゲストティーチャーとして招き、リモートで農地の見守りをしていただきながら、子どもたちと交流を深められるようにした。収穫の際には、ゲストティーチャーの方にも現場まで足を運んでいただき、子どもたちと共に活動することで、さらにつながりを深めることができた。

じゃがいもの収穫は、小・中連携の一環として、学区内の小学校の特別支援学級と共に行った。中学生は先輩として、小学生にどのように接すればよいのかを、事前に学習してから取り組むことで、相手に合わせて活動することができ、人との関わりについての自信につなげることができた。

収穫したじゃがいもは一定の重さに整理し、お世話になっている先生方や卒業生、地域の方々に頒布した。頒布する際に、日頃の感謝の気持ちを先生方や地域の方々に伝えることで、心と心の通い合う、人とのつながりにつなげることができた。

(3) 『SDGs』、『指力』、『考え』を意識した製品作りから頒布会までの取り組み

作業学習における製品作りをより意欲的に取り組むために、1月下旬に開催される作品展・頒布会を一つの目標としている。1学期には、縫製や木材加工の基本知識や動作を学習する。2学期前半には実際に製品を一人ひとりが最初から最後まで製作する。今年度は、『SDGs』の観点から地域の内装屋さんから処分予定の壁紙をいただき、壁紙の利用方法に子どもたちの『考え』を取り入れ、材料を使って卓上カレンダーを製作した。2学期後半には製品製作を経験した上で、それぞれが得意な作業工程を選択し、繰り返し同じ作業工程に取り組んだ。作業工程の中では『指力』を意識し、一つひとつの工程を丁寧に行った。本学級ではこの仕組みを職人制度と呼んでおり、子どもたちが自分の任された作業工程に対して、自信をもって取り組むことができた。この仕組みを取り入れることで、チームで一つの物を製作するという達成感をより味わうことができる。3学期に、校内で行う頒布会の練習では、子どもたちの『考え』をもとに社名を決め、それぞれの役割や役職を決めることで、子どもたちが主体的に活動に取り組むことにつながった。



4 成果と課題

成果としては、『SDGs』、『指力』、『考え』の視点を取り入れることで、子どもたちが日常的に『SDGs』の視点をもって主体的に行動することができ、学校生活の様々な場面でより多面的に自分の『考え』をもつことができるようになった。また、『指力』を意識した作業学習に取り組むことで、集中力も高まり、作業の精度をあげることができた。そして、作業の成果を発表する場や『考え』を表現する場を設けることで、子どもたちが人とのつながりを感じながら、コミュニケーションに喜びを感じることができるようになった。

課題としては、限りある授業数の中で、各教科等の学習と各教科等を合わせた指導のバランスをとりながら、関連を意識して教育活動に取り組むことである。現代社会の変化に対応していくためには、作業内容や頒布に際して、ICT機器等の活用が必要である。各教科等の学習でICT機器等を取り入れながら、子どもが、より実生活に即した内容を学習し、自立につながるように指導していきたい。

5 おわりに

今回の実践では、作業学習において各教科等の学習との連携で『SDGs』の視点を取り入れ、『指力』を高め、多面的な自分の『考え』をもつ取組を行った。作業学習は、「子どもたち一人ひとりが自信をもつことができる学習活動」であり、「たくさんの人とのつながりを通して、心と心を通い合わせ、コミュニケーションスキルを向上させることができる学習活動」であり、自立に向けた有効な学習であると確信している。今後も、子どもたちの自立につながる学習活動について、最善の方策を、職員間で連携を図りながら考えていきたい。